



「E-NEWS むらやま」で検索または 右記二次元コードから、バックナンバーも見ることができます。

全国学力・学習状況調査の結果から考える**授業改善**とは

令和6年度全国学力・学習状況調査の結果について、村山教育事務所指導課では、管内の状況を分析し、児童生徒質問紙と学校質問紙から①「児童生徒のウェルビーイングに関すること」②「各教科に関すること」に着目して、授業改善のポイントを見出しました。

各校の分析及び課題に応じた授業改善の参考にしてみてください。

授業改善のポイント

①「児童生徒のウェルビーイングに関すること」

全体的に児童生徒の幸福度は高いと考えられます。そして、児童生徒が「学校が楽しいと思うか」には、友達や教師などの他者とのつながりが関係しており、幸福度を向上させるために重要な役割を果たしていることがうかがえます。

一方、小・中学校ともに、「どちらかと言えば当てはまらない」や「当てはまらない」を選んでいる児童生徒が一定数いることを考えると、児童生徒一人一人の幸福度や「学校が楽しい」という気持ちを、さらに高めていく必要があります。

☆児童生徒一人一人に応じた指導や支援を充実していくことが必要です。また、学習課題や活動を工夫するなどの、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させていくことが重要です。

☆「生徒指導の実践上の視点」を意識した手立てを授業の中で意図的に講じることにより、学習指導と生徒指導の一体化を進め、自分のよさに気付いたり友達を支えていることを実感したりできるようにし、一人一人の多様な幸せの実現を後押ししていくことが大切です。

☆村山教育事務所指導課「自立した学習者」を育成するための**授業改善チェックシート**には、より具体的なポイントがありますので、ぜひ活用いただきながら、子どもたちの無限の可能性を引き出すために、これからも**日常の授業づくりに取り組んでいきましょう。**



【関連資料】

②「各教科に関すること」

【国語科】 ☆ポイント

各学校において(44)の内容を意識した指導により、小・中学校ともに成果が見られました。

質問番号	質問項目(出題の趣旨)	小学校	中学校
(30)	調査対象学年の児童(生徒)に対して、前年度までに、学習指導において、児童(生徒)一人一人に対して、学習課題や活動を工夫しましたか	93.0	78.1
(31)	調査対象学年の児童(生徒)に対して、前年度までに、学習指導において、児童(生徒)が、それぞれのよさを生かしながら、他者と情報交換して話し合ったり、異なる視点から考えたり、協力し合ったりできるように学習課題や活動を工夫しましたか	95.0	92.7
(32)	調査対象学年の児童(生徒)に対して、前年度までに、授業において、児童の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしましたか	96.0	100
(44)	調査対象学年の児童に対する国語の授業において、前年度までに、登場人物の人物像や物語の全体像を具体的に想像し、表現の効果を考えることができるような指導を行いましたか	95.0	95.1
3二	人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができるかどうかをみる	77.1	(+4.5)
3四	表現の効果を考えるなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することができるかどうかをみる	52.6	(+3.3)
(47)	調査対象学年の児童に対する算数の授業において、前年度までに、問題の考えを求めさせるだけでなく、児童に前向きな態度で取り組ませるような授業を行いましたか	99.0	90.2

育成したい資質・能力を意識して、日々の指導を積み重ねることが大切です。必要感のある対話や交流、話し合いなどの言語活動をとおして「比較する」「関連付ける」「見通す」などの思考を促す授業づくりを意識していきましょう。

【算数・数学科】☆ポイント

4

あなたたちは、時間や速さなどについて考えました。

あなたたちは、家から学校までの歩数を求めました。

家から学校までの道のりは、540 mです。あいなさんの歩は0.6 m となります。

家から学校までの歩数は、 $540 \div 0.6$ の式で求めることができます。

$540 \div 0.6$ を計算しましょう。

この問題を解くためには、どのような授業展開が考えられますか。

算数・数学の指導について、工夫や改善の意識が高いですが、どのようなことにつまずくかを想定した指導についての意識は低い傾向にあります。習得・活用及び探究のバランスを欠いている学習過程になっていないか、もう一度見直していきましょう。

将来の社会的自立を目指して

第2回村山地区協議会 10月7日(月) 東根市さくらんぼタレントクルセンター 大ホール

山形県の不登校児童生徒数は、年々増加しています。特に90日以上欠席が続いている児童生徒の中には、学習指導を十分に受けられず、学級担任とだけつながっている不登校児童生徒も数多く存在している現状です。不登校児童生徒の「進路」や「生活」のリスクが憂慮すべき状況にある中で、校内教育支援センターにも市町の教育支援センターにも通っていない児童生徒への支援が求められています。

不登校児童生徒の将来の社会的自立を目指し、関係機関との効果的な連携や支援につなげるために、これまでの取り組みを礎にしつつも、各校における不登校に関する取り組みを見直してみる必要があるのではないのでしょうか。

NPO法人 フリースクールあにまる
理事(兼)事務局長 荒木 秀和 氏

NPO法人 クリエイトひがしね
事務局長 村山 恵子 氏

不登校児童生徒の社会的な自立に向けて

- ・学校・家庭・フリースクールが、向かう方向を共有し、方針や連携、意思を相互理解した上で、対応している。
- ・「あにまる」は、主に学校と本人・家庭とのジョイント役。学校と情報共有しながら、総合的サポート体制を確立し、学校復帰(将来的な社会復帰)を目指している。



「遊育」と「共育」

- ・「遊育」:「遊びたい」「育みたい」を見守り、待つ。
- ・「共育」:大人も子どもも地域も共に育つ理念をもつ。
- ・子どもがやってみようとする時間を大切にしている。地域資源を活用しながら、それぞれが違った立場(地域・学校・家庭)で子どもを支えていきたい。

孤立を防止する

- ・「かぼちゃ」は、駆け込み寺=通過点として多く活用されている。
- ・「顔が見える関係性を体現すること」と「他領域の専門性を尊重すること」、「役割を分担して継続して関わること」、「現状の体制でできることを工夫して進めること」を大事にしていく。

西村山地域基幹相談支援センター
「かぼちゃ」
センター長 豊島 陽子 氏

小さなきっかけとして

- ・学習支援、訪問相談、保護者支援、学校や外部機関との連携に取り組んでいる。
- ・定期的な学校訪問や教育委員会での業務を通して、情報共有を密に行い、「居場所」と「学びの保障」のバランスを模索している。

寒河江市教育支援センター
「寒陵スクール」
教育相談員 片桐 芳子 氏

顔が見える連携を

- ・「SOSの出し方・受け止め方研修会」を実施したり、「不登校児童生徒の『指導要録上の出席扱い』に係るガイドライン」を策定(R6.4)し、周知したりしている。
- ・今後、関係機関の連携をコーディネートする機能の充実や社会的自立を目指した連携を強化していく。

寒河江市教育委員会

《参加者から》

- ・学校外にもこんなに頼れる存在がいることを改めて知ることができました。同じ生徒の社会的自立を目指すという目的を持ち、共に生徒の成長をサポートしていく存在としてこれまで以上に積極的に連携をとっていきたいと思います。(中学校教諭)
- ・それぞれの持ち味を生かした連携があること、その子にあった支援をしていくことで、どの子にも居場所をつくれることができると感じました。(小学校教諭)

(一部抜粋)

地域づくりは つながりづくり

第15回山形県社会教育研究大会

(兼)第11回村山地区社会教育推進協議会研修会

10月18日、河北町サハトベに花を中心会場に、県内各地から455名の社会教育関係者が集い、標記研究大会が開催されました。本大会は、「未来をひらき、地域をつくる社会教育の在り方 つなぐ～いのち・学び・地域」を研究主題として、日頃の社会教育活動の情報や研究成果を学び合うことにより、生涯学習社会の実現に向けた社会教育の在り方を探るとともに、社会教育の重要な拠点である公民館等の活動の充実を図り、県内の社会教育の一層の振興・発展を目指しています。

安藤耕己大会会長（山形大学地域教育文化学部教授）は、これまで地域で取り組まれてきた日々の学習が活力になっていること、そこで展開する対話と共感によって形成され蓄積されていく「つながり」こそが、地域づくりや地域課題に取り組むための資源となることを挨拶の中で述べられました。

また、ミッチーチェン氏による記念講演では、会場である「河北町」の魅力伝えるためのアイデアを具体例として、地域から元気を発信していくためのたくさんのヒントをお話いただきました。



さらに、4つの分科会では、「現代的課題等への対応」、「学習機会・学習環境の充実」、「関係機関等との連携・協働」、「次世代への人材育成」をテーマに、県内8団体より事例提供いただきました。今後の社会教育の場において、地域の公民館・コミュニティセンター等を拠点として何ができるか、社会教育の意味と可能性を共有しながら、活発な意見交換と議論が展開されました。どの実践も様々な工夫がなされた取組みで、参加者にとって明日からの活動につながる有意義な時間となりました。



【第2分科会】学習機会・学習環境の充実

「かほく町民大学ひなカレッジ」の活動について

◇実践内容

- ・町民による実行委員会を中心とした企画・運営
- ・講座内容(大講座・小講座・公開講座等)の工夫
- ・積極的な広報活動

◇成果

- ・町民が実行委員となる企画・運営により、幅広い講座の開催につながっている。

◇参加者の感想

- ・各地域の活動状況を知ることができて良かった。
- ・世代交流の事業展開には、どうしても年代別の課題がそれぞれで、その問題を解決する術が見つからない。子どもだけ、高齢者だけの事業が中心となっているのが現状だと思った。



【第3分科会】関係機関等との連携・協働

尾花沢市西原地区親睦会による「かかしで地域づくり事業」の取組みについて

◇実践内容

- ・地区総会で「かかしの郷宣言」をし、看板設置
- ・地区民みんなでかかしづくり
- ・「かかし君ニュース」の発行、感謝祭の開催

◇成果

- ・かかしが人と人をつなぐ接着剤である。このつながりづくりが地域の活性化につながっている。

◇参加者の感想

- ・行政に過度に頼らない活動が長続きの秘訣で、その意識を持つ住民を育てる必要性を感じた。
- ・小さな集落の取組み、世代間交流はどこの地域にも共通した課題であり、今後も紹介してほしい。



令和6年度 育ちと学びをつなぐ 幼保小中接続推進研修 (兼)第2回学習指導力向上研修会

参集型開催

山形県教育センター
令和6年10月31日(木)

本研修会には、管内の幼児教育関係者39名、小中学校関係者38名、行政関係者9名、合わせて86名の方に御参加いただきました。研修では、幼児期における子どもの育ちを小学校以降の教育にどのように活かしていけばよいのかについて、幼児教育施設における実践発表や小学校での生活科や教科学習等における具体的な事例を踏まえた御講演から学びを深めました。

「架け橋プログラム」がスタートして今年で3年目を迎え、管内でも接続を意識した各校種における取組みが進んでいますが、進め方が分からないという声も数多くあります。今後、各校種で取組みをさらに進めていくためにも具体的な事例から学び、幼保小で一貫性のある教育の充実を目指していきましょう。

実践発表

「幼児期の自発的な遊びから学びへつなぐ」 ～子どもの『やりたい』が生まれる環境をめざして～

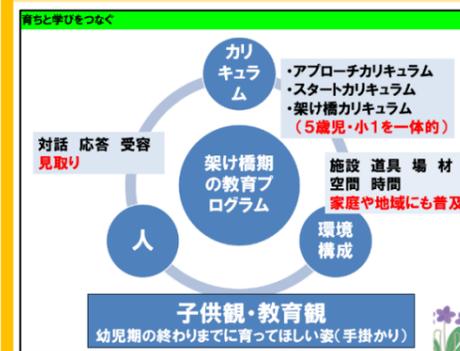
子どもの自発性を育むために大切なのは、様々な場面で子どもが自己選択できるということです。どこで遊んでみたいのか、何を使って遊んでみたいのか、遊び出すタイミングはいつなのか等、子ども自身が『選ぶ』ことができることが大切です。夢中で遊ぶ経験をたくさんしてきた子どもたちは、小学校へ行っても夢中で学ぶようになるはずですよ。



東北文科大学付属幼稚園
教諭 太田 智子 氏

講演

「幼児期における子どもの育ちと学びを生かす教育の在り方」



基本的な考え方

「架け橋期の教育プログラム」(左図)を根底から支えるものは子ども観であり教育観です。「子どもは何もできない」ではなく、「子どもはいろいろなことができる」という子ども観、教育観を教師がもつことができれば、まずはやらせてみようとなります。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手がかりに、子どもの育ちと学びを知ることも大切です。



元文部科学省主任視学官
元文科大学教育学部教授
嶋野 道弘 氏

カリキュラムでつなぐ

幼保小の接続において、カリキュラムでつなぐことは重要です。入学当初は「遊びに夢中になれる時間」を多めにつくり、徐々に「生活科を中心とした合科的な時間」、「教科の時間」に移行するなどの工夫が求められます。

教師がつなぐ

教師が大事にしたいのは、「見取り」という営みです。大前提は、子どもに「興味・関心」を持つことであり、次に、言葉や表情、日常の姿から多面的に「つかむ」ことです。そして、教師は、見た目だけでなく内面を推し量り、自分なりに子どもの行為を解釈して指導に生かすことが、子どものさらなる育ちや学びにつながっていきます。

感想より

子どもが意欲を持ってとことん作りこんだり、夢中になって取り組んだりするための保育者の援助は重要だと実感しました。また、使いたい時に使いたい物を使える環境をつくり、園児が意欲的に活動することをサポートし、見守れる保育者でありたいと心から思いました。(保育教諭)

幼保小の連携を形式だけのものにならず、小学校の教員として幼児教育で大切にしている考え方や保育の仕方を十分に理解し、主体的な学びに繋げていくようなカリキュラムを準備していきたいです。(小学校教諭)

「中一ギャップ」の解消のため、子どもの経験値を繋いでいき、安心して生活できる環境をつくるのが重要だと思いました。つまづいている子どもの思いに寄り添い、できそうなことを提案しながら納得解を子ども自身が得られるように支援していくことを大切にしていきたいです。(中学校教諭)